

流派紹介

(あいうえお順で掲載： 流儀名は、日本古武道振興会流儀解説書に準拠)

1. 合氣道 (開祖) 植芝 盛平

合気道は、開祖植芝盛平翁（1883～1969）が日本伝統の武術の奥義を究め、さらに厳しい精神的修行を経て創始した現代武道である。合気道は相手といたずらに力で争わない。入身と転換の体捌きから生れる技によって、お互いに切磋琢磨し合って稽古を積み重ね、心身の鍛成を図ることを目的としている。合気道は他人と優劣を競うことをしないため、試合を行わない。お互いを尊重するという姿勢を貫く合気道はいのちの大切さがうたわれる現代に相応しい武道といえるだろう。合気道が「和」の武道といわれる所以もここにある。

2. 小笠原流弓馬術礼法・墓目の儀及び、百々手式 (流祖) 小笠原 長清

小笠原氏は、其祖新羅三郎義光に出る。義光の曾孫加賀見二郎遠光射術に長じ、高倉天皇承安年中に勅を奉じて紫宸殿の怪を払い王家の家紋を賜う。其子左京太夫長清始めて小笠原氏を称し、小倉、唐津両家の祖となる。長清三代伊豆守清経別に一家を創る。是当家の祖なり、爾来両家射術をもって鎌倉幕府に並仕す。後、子孫継承し、足利、徳川の將軍に仕え弓馬礼法の道を伝う。当家歩射伝承には鳴弦、墓目を始め百々手式、大的式、草鹿等多く、特に鳴弦、墓目は公開の席上で行うことはなかった。

3. 小笠原流弓馬術礼法・騎射の型 (流祖) 小笠原 長清

騎射とは騎乗して弓矢を射る事を意味し、騎射が時代と共に儀式化され、五穀豊穣の祈願、魔除の祈願などに催し、代表的なものに流鏑馬（やぶさめ）が行われた。流鏑馬は、記録によると平安時代のものが一番古いが、実際にはもっと溯って行われていたと思われる。全国の神社では、古くから競馬（くらべうま）、流鏑馬などの祭事が行われており、また古書にも、犬追物（いぬおいもの）、笠懸（かさがけ）、など武士が武技を練った馬術とは別に、宮廷や神前で行われた流鏑馬の文献もみられる。神事として、発達、洗練されて来た事も周知の通りである。的中により、年占をしたり中り的を御守護として、頂く事も一般的になっている。

源頼朝が鶴岡八幡宮の祭礼に流鏑馬を奉納して、特に天下泰平・国家安泰の祈願を籠めたものには、古い歴史と、神事としての深い理由があったのである。

流鏑馬射手の服装は、古来「あげ装束」と云われ、儀礼化された鎌倉武士の狩装束として伝わる。頭に引立鳥帽子、綾襷笠（あやいがさ）を冠る。鎧直垂、射籠手（いごて）、夏鹿毛の行縢（むかばき）を付け、太刀を佩き腰刀を差す。背に箭を負い、鏑矢に雁又（かりまた）の付いた矢を盛る。鞭をつけ、弓を握る。足は物射沓（ものいぐつ）をはく。

騎射挾物（きしやはさみもの）は、流鏑馬を簡素化された式で、徳川吉宗が創案された。射手の服装は、筒袖の着物に袴（免許の後、小袴）をつけ、射籠手を差し黒足袋をはく。

4. 尾張貫流槍術 (流祖) 津田権之丞信之 (春風館道場)
柳生新陰流兵法 (流祖) 柳生兵庫之助利巣

貫流槍術は尾張のみに伝えられた流儀である。貫流の祖は津田権之丞信之で、先祖は平家織田氏の一族である。役を退いた後一介（いっけい）と号した。尾張藩馬廻役千石津田太郎左エ門知信の次子として生まれ、幼き頃より槍術を好み伊東流管槍を虎尾三安の門人森勘兵衛に学んだ。勘兵衛の尾張退去後も更に佐分利円右衛門忠村を師とし、寛文10年5月15日16歳にしてその奥伝を学び取り、後も朝鍛夕練ある日豁然としてその大道を悟り、横手長矩心理一貫の極意を自得し、管に活気の妙あることを知り、新しく派を建て、貫流と称した。世にこれを津田流あるいは、津田貫流ともいい、元祖5年槍奉公となり三百石を賜った。藩主徳川吉通はことのほか熱心で、他藩に伝えることを禁じたことから御止流とも言われた。

これは別名試合勢法とも云い、柳生流補佐役長岡桃嶺子先哲の教えを受け、八勢法を始めとする八本のかたに始まり、表六十一勢法、前に三勢法、併せて六十四本、後の雷刀三十一本、外の雷刀三十一本、その他小太刀、二刀のかたなど剣に関するかた計百数十本、その他やり、なぎなた等に関するもの二十数本、試合がたの基準として伝えられたものである。

5. 鹿島新當流剣術 (流祖) 国摩眞人及び塙原ト伝

日本の武道発祥地として鹿島は香取と共に古い歴史と道統を有している。今から約千六百年前、鹿島神宮大行事大鹿島命の後裔国摩眞人が鹿島神宮境内に神壇を築き、祈願熱祷を捧げて神託を受け、武饗槌神の神剣「節靈剣」の法則である神妙剣の位を授かり、以後「鹿島の太刀」と称して大行事座主職ト部吉川家を中心に継承されていた。後、鹿島の太刀は上古流・中古流と発展的に呼称され、また「鹿島七流」といわれるほど隆盛を極めた。一四八九年、ト部覚賢の次男に生まれ、後塙原土佐守安幹の養子となつた塙原ト傳高幹は実父から「鹿島中古流」を、養父からは「香取神道流」を学び、また武者修行による修練を重ね、かつ鹿島神宮に一千日の参籠祈願をして「心新たに事に当れ」との神示を受けるとともに鹿島の太刀の極意を悟り、流派名を「鹿島新當流」と改め。生家ト部吉川家に継承され今日に及んでいる。

甲冑武道を基礎として想定された実戦的古武道である。身は深く与え、太刀は浅く残して心はいつも懸りにて在りと伝えられてきた。甲冑の弱点とされる小手・喉・頸動脈・上帯通し等を突き、切ることで相手を制する。

6. 鞍馬流剣術 (流祖) 大野 将監

京都の鞍馬山には、源義経が、鬼一法眼に就いて修行し、超人的な腕前に達した、との言い伝えがある。鬼一法眼は義経の他、鞍馬の八人の僧兵へ武術を伝えており、これが鞍馬八流、または京八流と呼ばれているが、確かなことはわかっていない。流祖の大野将監(天正年間の人)が何人について修業し、この刀法を編み出したかは戦災により秘伝書焼失のため不明である。鞍馬と名のつく流派は剣・槍・棒・抜刀などいくつかあったが、剣術では将監鞍馬流だけとなってしまった。

将監鞍馬流は、天正年間に大野将監によって創始され、林崎甚助、加藤玄蕃、幕末から明治にかけて、十四代金子助三郎、十五代宗家を継いだ柴田衛守が流派の中興の祖といわれている。柴田衛守は直參旗本出身で、東京四谷に習成館道場（勝海舟命名、一八七九年創設）を開いて門人を育てる。大日本武徳会剣道範士、警視庁剣道主席師範をつとめる。衛守の子勸（警視庁、貴衆両院剣道師範）と受け継がれたが、昭和二十年の戦災で習成館道場は焼失し、鞍馬流の秘伝書、古文書、武具など全て灰となってしまったのは誠に惜しい極みである。その後勸の子十七代鐵雄により道場は再興され、現在は鐵雄の子章雄が十八代宗家として鞍馬流と、東京にある個人の剣道場では一番古い剣道場習成館を継承している。

鞍馬流の木刀の形は、蛤刃の太い木太刀を使って行い、気迫に富んだ発声をもって演武するのが特徴である。形は七本ありその名称は、正當剣、閃電、燕飛、青眼、変化、氣相、水車である。五本目の変化は、「警視流木太刀の形」の二本目に採用されている捲き落とし技で、現代剣道においても大いに活用されている。鞍馬流居合は五本あり、その名称は一字、胸之位、戻り打、上段、地摺である。

7. 示現流兵法剣術 (流祖) 東郷藤兵衛肥前守重位

蜻蛉と呼ばれる独特の構えから激しい気合とともに打ち下ろされる太刀筋で知られる示現流は、「一の太刀を疑わず、二の太刀は負け」の教え通り最初の一太刀にすべてをかける薩摩独特の兵法で、流祖は東郷藤兵衛肥前守重位。

重位は始めタイ捨流を学び二十数歳で極意に達したが、天正十六年（一五八八年）、島津家十六代当主島津義久公に従って上洛した際、天真正自顕流の蘊奥を極めその剣を秘していた京都萬松山天寧寺の善吉和尚と邂逅、強いて教えを請い修業すること半年有余、秘訣の全てをうけ奥義を極めた時が二十八歳であった。

重位は薩摩に帰ってからもよく秘訣を守り、自宅で立木・生木を相手とし屋敷内全部の木を打ち枯らして心技を練ること三年、タイ捨流と天真正自顕流の精髓を綜合渾和して編み出したのが示現流である。

重位は、初代薩摩藩主（島津家十八代当主）家久公により一六〇四年藩の剣術師範役を命ぜられ、以後歴代の藩主も示現流を奨励した。流儀名は、薩摩藩学僧南浦文之により仏教經典の一節「示現神通力」より引用「示現流」と正式に命名された。十代藩主齊興（二十七代津島家当主）の代に「御流儀示現流兵法」と称するよう命ぜられ門外不出とされた。

創流以来四百三十年、当初そのままの姿で一子相伝され、歴代の古文書（鹿児島県指定有形文化財東郷家古文書）と共に、現在十三代東郷重賢に伝承されている。

8. 濵川一流柔術 (流祖) 首藤藏之進満時

濵川一流柔術の流祖 首藤藏之進満時は、彼の叔父で宇和島藩浪人と伝えられる宮崎儀右衛門満義に連れられて廣島藩安芸郡坂村に居住した。藏之進は宮崎儀右衛門を師として渋川流および難波一甫流を習得し、さらに武者修行の途上、浅山一伝流をも習得して三流をもとに「濱川一流柔術」を創始する。

天保十年ころ松山藩に仕えることになったと伝えられている。この後、松山藩では首藤藏之進は小玉平六と名乗り、松山においても濱川一流柔術の教授をおこない、明治維新以降は親族のいる広島県安芸郡坂村にたびたび帰り、広島の門弟にも濱川一流柔術を伝え残し、明治三十一年、八十九歳で松山において没する。

師伝によれば、濱川一流の流名は首藤藏之進が修行した三つの流派の流名に由来し、あわせると渋川一甫一伝流となり、この意から「濱川一流」と命名されたと伝えられている。

濱川一流柔術の形は徒手に対して徒手、または懷剣、三尺棒、刀等の仕掛けに徒手で応じる形と棒術（五棒・小棒・三尺棒・六尺棒）、十手術、分童術、鎖鎌術、居合術などの得物を用いる術から成り立っている。形は約四百ほどあるが、その特徴はすべての形に飾り気がなく、素朴で単純な動きで相手を制するところにある。

9. 新陰流居合術 (流祖) 柳生但馬守平宗巖 精勇館道場

永祿・慶長の頃、水早長左衛門信正という豪族が、制剛という僧から柔術の極意を受け、又居合にも通じていた。弟子の梶原源左衛門直景は師信正の極意を承継し、制剛流柔術と居合を以て尾張大納言義直公に仕えた。制剛流八世で新陰流師範補佐でもある、長岡惣三郎房成が制剛流居合を大成し、「柳生制剛流居合術相伝書」を残した。この相伝書が柳生家に伝わり、柳生巖長師により、新陰流の刀法の術理により、練り直され完成された。

柳生巖長師は昭和6年2月14日名古屋第3師団剣道競技大会で「新陰流居合」の流名で演武されている。この年に先代精勇館々長・鹿嶋清孝師は柳生巖長師に師事する。

昭和11年3月、鹿嶋清孝師は免許皆伝を許される。免許の見出しへは「柳生流兵法抜刀」となっており、「伝來」には「流祖、柳生但馬守平宗巖」、以下代々の柳生家の道統が記載されている。

昭和13年7月17日鹿嶋清孝師は「精勇館道場」を建設し、柳生巖長師を招き居合の教授をお願いした。その際柳生巖長師は「これが本当の新陰流の居合」と、言われた。鹿嶋清孝師はこれにより「新陰流居合術」と、称することになった。

戦後間もない昭和20年秋、名古屋駐留米軍指令部から「柳生流を見たい」と米軍将校が精勇館に来た。鹿嶋清孝師は柳生巖長師と栗本信三師と共に米軍指令部で「新陰流居合・新陰流

「兵法」を演武し、「神業である」との喝采を得た。その場で軍属2名が精勇館に入門し、指導したが、その際「剣道はもとより居合も個人で稽古することは差支えない」との確証を得た。これにより精勇館では、戦後の混乱期にも「新陰流居合術」の名称で稽古を続けた。

鹿嶋清孝師は戦前は大日本武徳会京都大会、戦後は全日本剣道連盟京都大会で演武し「新陰流居合」を全国に広めた功績は大きい。昭和37年には「名古屋まつり協賛日本古武道大会」を鹿嶋清孝師が主唱し、市会議員の宮田一雄氏、弓道家の富田剛一氏の協力を得て開催し、現在に至っている。

現在精勇館々長に鹿嶋清治氏が当り、門人相寄り、柳生巖長師、鹿嶋清孝師の居合を正しく承継している。

10. 心形刀流剣術 (開祖) 伊庭是水軒秀明

心形刀流は江戸時代初期、伊庭是水軒秀明が開祖した流派である。八代伊庭軍兵衛秀業は江戸下谷に道場を開き、当時北辰一刀流千葉周作、神道無念流斎藤弥九郎、鏡新明智流桃井春蔵らと共に、江戸四大道場と称せられた。九代伊庭軍兵衛秀俊が幕府講武所師範役に出仕したことで全国に広まり、心形刀流を採用した藩は多くあった。なお伊庭八郎の幕末動乱の際の豪勇ぶりは大変有名であるが函館五稜郭の戦いにおいて27歳で戦死した。

亀山藩士山崎雪柳軒は八代秀業に師事した。免許皆伝の後、亀山に帰り元治2年道場を建て、亀山演武場と称して心形刀流を修業、また門下の指導にも当たった。廃藩後、同流儀が廃絶していく中、心形刀流は亀山でのみ今日まで伝承され昭和50年三重県無形文化財(第1号)に指定された。なお星霜に耐えた幕末の道場は昭和60年1月焼失したが、同63年に復元落成している。

心形刀流は心の修養を第一義とし、技の鍛磨を第二義とする。すなわち技は形であり、心によって使うものである。心正しければ技正しく、心の修養足らざれば技乱れる。この技が刀の上に具現され流名の心形刀流となる。

11. 神道夢想流杖術 (流祖) 夢想権之助勝吉

木曽の住人夢想権之助は香取神道流剣術(流祖・飯篠山城守家直)を学び、奥義を極め、更に鹿島新当流(流祖・松本備前守)を学ぶ後、筑前の竈戸神社に参籠のとき、「丸木を以って水月を知れ」と云う神示を賜り夢想流をあみだしたと云われる。杖は直径八分(2.4cm)長さ四尺二寸一分(128cm)の丸木であるが、操作次第で突き、払い、打ちを主体に右に応じ左に変じ千変万化し、敵をして対応にいとまなくしむることが特徴である。突けば槍、払えば薙刀、持たば太刀、杖はかくにもはずれざりけり。その指導原理は同流伝書の「傷つけず人をこらして戒むる、教えは杖の外にやはある」とある如く、あくまで平和の中に偉大な武の徳を顕現するところにある。形は表業、中段、乱合、影、奥伝、秘伝等六十四が示される。

黒田藩の杖は武所として代々相繼。杖術、一心流鎖鎌術、一角流十手術、一達流捕縄術、中

和流鉄扇術等だが、通常前三流を公表している。

12. 神道夢想流杖道 (流祖) 夢想権之助勝吉

神道夢想流杖の開祖、夢想権之助勝吉は慶長年間（約400年前）の人と伝えられ香取神道流武術の祖、飯篠山城守家直の門に入り香取神道流の奥義を究めその免許を受け、さらに鹿島神流の極意「一の太刀」を授かったと伝えられる。

そのころ夢想権之助は多くの剣客と試合をし敗れたことはなかったが、時代を同じくする剣豪宮本武蔵との試合で十字留にかかり敗れた。

それ以来、夢想権之助は武蔵の十字留を敗らんと、筑前の国（福岡県筑紫郡）に至り、大宰府天満宮神域に連なる靈峯宝満山に登り玉依姫を祀る竈戸神社に祈願参籠、満願の夜、夢の中に童子が現れ「丸木をもって水月を知れ」とのご神託をもとに四尺二寸一分、直径八分の杖を用い、これに槍、薙刀、太刀の三つの武術を総合した神道夢想流杖を編み出し、再度、宮本武蔵に試合を挑み見事十字留を敗ったと伝えられている。

その後、神道夢想流杖は福岡黒田藩に用いられ十数人の師範家を起こし盛大に指南され、特に藩外不出のお留め武術として四百年来伝えられて来たものである。

近年において神道夢想流杖は実戦的かつ実用的な卓越した武術と高い評価をうけ、第二次世界大戦前においては著名な剣道家、柔道家、海洋少年団、満州国全土の青少年訓練に用いられ、戦後には警視庁機動隊、大阪府警機動隊においても警杖と呼称、採用され、現在では各種団体、企業、大学におけるクラブ活動など全国で普及活動が行われており、特に海外における杖道愛好者の増加は眼を見張るものがある。

神道夢想流杖の伝承とその普及を目的とした愛杖会は、愛知県において早くから神道夢想流杖の普及と武道を通じて青少年の育成等に貢献、活躍された故濱地光一師範（昭和60年没）の杖に対する心とその精神を引継ぎ活動している。

13. 神道無念流剣術 (流祖) 福井兵右衛門

流祖・福井兵右衛門嘉平は元禄十三年下野国に生まれ、はじめ一円流の師野中権内について修業し、技心大いに衆に抜きんでて諸国武者修業に励み、信州戸隠の飯綱権現に立ち寄って参籠、祈願すること五十日に及び、ついに剣の奥義を悟り、神道無念流を創始したといわれる。

その後、江戸四谷に道場を開き、門弟の育成と流派の発展に努力したが、神道無念流が広く世間に知られるようになったのは戸賀崎熊太郎暉芳からである。暉芳は延享元年武州清久村の生まれで、十五歳のときに江戸に出て嘉平に師事し、入門六年後、弱冠二十一歳で免許を得た。

のち、岡田十松や斎藤弥九郎などの剣客がこの門から出るに及んで一層隆盛を極め、とくに斎藤弥九郎は、北辰一刀流の千葉周作、鏡心明智流の桃井春蔵と並び幕末三剣豪といわれた。門下には江川太郎左衛門、藤田東湖、桂小五郎、品川弥二郎、秋山要助、仏生寺弥助ら錚々たる剣客や人物が輩出した。明治以降、根岸信五郎、中山博道によって受け継がれた。

14. 関口流抜刀術 (流祖) 関口八郎左衛門源實親

流祖は、江戸時代初期の人で紀州藩士である。関口流柔術の開祖である関口柔心の長男として生まれ、父より刀・槍・柔術などを習い、豪勇であった。承応三年紀州藩を辞して諸国修行の旅に出、後、江戸の芝浜松町に道場を開いた。延宝元年紀州藩に帰参し、頼宣公に仕え、五百五拾石を給せられている。江戸の道場には、信州松代藩主眞田伊豆守はじめ、諸国の藩士が多数入門して、関口流は全国に伝播し、多くの系統に分かれた。

私どもの流儀は、流祖の高弟で渋川流柔術を立てた二代渋川伴五郎義方に江戸で学んだ、熊本藩士井澤十郎左衛門長秀によって肥後に伝えられ、一名肥後流とも称するものである。長秀は、山崎闇斎の門人で、神道、国典に精しく、また漢学に通じ、「武士訓」等著書多く、文武両道の人であった。帰国後、長秀は秀れた抜刀術を認められて居合師役に任せられ、以来道統は連綿と今日に及んでいる。

当地方には、二天一流第八代宗家で十四代青木規矩男の台湾時代に学んだ十五代亀谷鎮により伝えられ、貫流槍術第八代宗家でもある十六代高木和雄を経て、十七代宮寄勇夫より、十八代徳井哲夫・祖父江光紀へと継承されている。

身長より三尺引いたやや長い刀を用いるため、鋭く引鞘をして抜刀し、大声に気合をかけながら飛進って、全体重を刀にかけて斬る激しい刀法が特色である。

業は坐業の居合一本、小太刀五本、立業の歩合五本、袖抜三本、その他に懐剣三本、太刀抜三本、介錯の太刀、大太刀抜を伝えている。

15. 竹内流腰廻り小具足 (流祖) 竹内中務大輔源朝臣久盛

流祖竹内中務大輔源朝臣久盛は、清和源氏経基王より十五代の後裔從三位竹内大膳大夫豊治の長子播磨守幸治の子で、美作国併和郷一の瀬城主である。

幼児より勇壮で剣を好み長ずるに従い、その道に通ずるといえども未だ足らざると悟り、愛宕神を信じ作州併和郷三の宮に参籠し、日に三度斎浴して武神に祈願し、二尺四寸の木刀を以って大樹を打ち技を練ること六日六夜、忽然と武神現われ兵法の一術を示そうと彼の木刀をとり長きに益なしと之を二つに切って、小太刀とし、小具足と命名し、その奥義を授かり、又かずらをとって武者揚を授かり之を迅縄と稱えた。

以来竹内流捕手腰廻り小具足組討と号して、その業が妙域に達した。時に天文元年6月24日の事であり、竹内流が始めて世に行われるようになった。

当流は柔術の草分けである。

二代目常陸介久勝、三代目加賀介久吉共に近衛、鷹司閑白よりそれぞれ日下捕手開山の御綸旨を賜わり、全国武者修業に於ける真剣勝負を流儀に補い親子孫三代に渡っての洗練された流儀である。竹内藤一郎源久宗氏は、宗家十四代目師範であり、現在岡山県御津郡建部町角石谷に、当時の道場が現存し指導に当たっている。

16. 立身流 (流祖) 立身三京

たつみさんきょう

流祖立身三京は足利時代、伊豫の国の武将で、幼少より武術に精進し、幾多の勝負に勝ち抜いたが、技法を超えた高度の心法を極めんとして、妻山大明神に祈願して大悟し、勝機を未撃に知る無我の心境に達し、必勝の原理を体得し、立身流を創始した。江戸時代は下総佐倉の堀田藩で、武士教育の中核として重視され、権威ある宗家統率のもとに、非凡な剣士に厳しく伝承され、伝書十五巻や古文書と共に、正確に現在まで伝えられた。幕末頃には半澤成恒・逸見宗助・兼松直簾らの名人が出た。

警視流の形には、立身流から剣術に「巻落」、居合に「四方」、柔術には「柄掲み」各一本宛採用された。豊前中津の奥平藩に立身流の分派立身新流があって、福澤諭吉はこれを学び、晩年まで自負したのは有名である。

昭和41年 千葉県佐倉市無形文化財指定

昭和53年 千葉県無形文化財に指定替

現保持者 第22代宗家 加藤 紘

17. 天真正伝香取神道流 (流祖) 飯篠長威斎家直

「天真正伝香取神道流」は飯篠長威斎家直を流祖として、下総の国香取の地に伝承する武術である。家直公は六十余歳にして香取大神に壱千日の大願をたて斎戒沐浴、兵法に勵み百鍊千錬を重ね粉骨の修行の後、香取大神より神書一巻を授けられたと伝えられ、その後、連綿と続き、現在宗家二十代目飯篠快貞に至っている。

その間、有名な門流には上泉伊勢守、塙原土佐守及びト傳、松本備前守、諸岡一羽斎、秀吉の軍師竹中半兵衛、奥州仙台家老片倉小十郎（白石城主）、幕府旗本には中台信太郎、松本直一郎、伊庭軍兵衛ら、また諸藩の代々指南家等々枚挙にいとまがない。

なお当流には剣術、居合術、柔術、棒術、槍術、薙刀術をはじめ奥には軍配法、築城法に至る総合武術として、古来軍学者や武術たちが学んだ兵法から入り、平法に至るまでの修行法が残されている。

18 天神真楊流柔術 (流祖) 磯又右衛門柳闇斎源正足

流祖は紀州藩士、磯又右衛門柳闇斎源正足（文久3年・1863年没）伊勢松坂生まれ。楊心流、真之神道流を修行し、奥義を極める。京都北野天満宮に参籠し楊柳の風になびく様（柔軟性）を観て大悟し「天神」と、これまでに修行してきた二流の文字「真」と「楊」を合わせて天神真楊流と名付けた。江戸神田お玉ヶ池に道場を開き、門人が5千余りを数え百二十四本の手数及び活殺の秘術を伝授した。講道館柔道の創始者嘉納治五郎師範は明治10年に師範家、福田八之助の門に入り修行を始める。明治12年師の死去にあい、三世磯石衛門源正智について修行を続け、その理合いや技を応用し明治15年講道館柔道を創始した。

柔軟な身体をもって相手の気力に逆らわず、変化に応じ相手を崩し制する。投技、関節技、絞技の多くが講道館柔道の基盤となっている。また実戦における複数の相手に対応する真の当（生理的弱点を突く・蹴る）を技法の中で活用している。活法及び接骨技法に於いては、近代の柔道整復術

に多大なる影響を与えている。

19. 天道流なぎなた (流祖) 斎藤半官伝鬼房勝秀

天道流は今から約450年前、常陸の国（現在の茨城県）に生まれた斎藤半官伝鬼房勝秀によって創始されたものであります。

伝鬼房は、塚原ト伝の門に入り、刀槍の術を学び自己の技の未熟を感じ、天正9年、鶴ヶ丘八幡宮に百日の参籠をし、誠の道に叶う剣の技を得て一流を興して天道と称し、後に天道流と改められ多くの門弟に誠の心と技を伝えました。

諸国修業をおえて郷里に帰り霞神道流の櫻井大隅守との決闘の際に示した矢切の術を一字字の乱れといい流儀の基本になっております。

現在、薙刀・二刀・杖・剣・鎖鎌・小太刀等の技が伝承されています。流儀の特徴は形試合であって、形そのものが即ち真剣試合のことです。

現在第17代宗家 木村恭子先生が継承されております。

20. 宝蔵院流高田派槍術 (流祖) 宝蔵院覚禅房法印胤栄

流祖 宝蔵院覚禅房法印胤栄（1521～1607）は南都興福寺の僧。武芸を好み槍の修練に努め、猿沢池に浮かぶ三日月を突き鎌（十文字）槍を工夫し、ついに天文二十二（1553）年正月十二日払暁、摩利支天の化身、成田大膳太夫盛忠から二箇の奥儀を受けられ、宝蔵院流槍術を創めるに至った。さらに、柳生但馬守宗厳と共に上泉伊勢守秀綱から刀術を学び宝蔵院流槍術を大成させた。

そして後日、高弟中村尚政にその正統を伝え、さらに尚政からその妙術を承継したのが高田又兵衛吉次。高田又兵衛は後に小倉藩に移り、以後子孫代々これを相続した。

宝蔵院流の槍は、通常の素槍に対し鎌槍と称する十文字形の穂先に特徴があります。この鎌槍は攻防に優れ画期的な武器として「突けば槍 薙げば薙刀 引けば鎌」とにもかくにも外れあらまし」との歌が伝えられるように、江戸時代を通して全国を風靡し、日本を代表する最大の槍術流派として発展した。

21. 無雙神傳英信流抜刀兵法 (流祖) 林崎甚助重信

無雙神傳英信流抜刀兵法は戦国時代末期の人、林崎甚助重信を流祖とする。江戸時代に入り長谷川英信に学んだ荒井信定は山内家家臣、土佐藩士林守政にこれを伝えた。

林守政は延宝5年（1677）、15歳の時に江戸への供を仰せつかり、江戸で荒井信定から諸武芸を学んだが、土佐に帰った後、武術は居合を教授し、土佐藩で伝承されることとなった。林守政はまた、新陰流の剣術の師である大森六郎左衛門に大森流の居合をも習い、これを併伝した。

幕末に至り山川久藏は土佐藩の藩校・致道館において土佐藩の居合教授における最高の地位

である居合指南役となり、山川の没後はその弟子、下村茂市が後をついで居合指南役となり明治維新に至るまで無雙神傳英信流抜刀兵法を教授した。その下村茂市を師とし、大正まで無雙神傳英信流を伝えたのが土佐の自由民権運動の重鎮である細川義昌であった。細川は大日本武徳会高知支部常議員として居合の指導を行い、香川県の植田平太郎に免許皆伝を授け、その業が現在まで受け継がれている。

無雙神傳英信流の形は正座から行う大森流、立膝から行う英信流 表・奥、剣術的技法である太刀打、剣術と居合の中間的な技法である詰合、柔術的技法である大小詰・大小立詰から構成されている。

22. 柳生新陰流兵法 (流祖) 上泉伊勢守藤原信綱

戦国末期、上州の住人、上泉伊勢守藤原信綱は刀・槍の術にすぐれ、若くして諸流に達し、特に愛洲日向守移香斎の陰流の奥旨を究め、その中から「転」(まろばし)を工夫発明して、新陰流を創始した。その後永禄8年、信綱は「無刀の位」を開悟した大和の住人、柳生石舟斎宗厳に印可相伝をなし、これを正統第二世とした。宗厳の五男宗矩は徳川家康に仕え、將軍秀忠、家光の兵法師範となり、大名に列して当流の剣名を天下に広めた。次いで十兵衛三嚴、宗冬、宗在、俊方、俊平・・・と伝えたが惜しくも兵法に遠ざかってしまった。一方宗厳は、嫡孫兵庫助利厳の偉才を愛し、膝下に置いて朝鍛夕錬、流祖以来の流儀の玄妙の悉くを伝えた。

慶長10年、宗厳は利厳に印可相伝して、これを正統第三世とした。元和元年に利厳は尾張藩主初代徳川義直の知遇を得て、その兵法師範となり名古屋に移住した。利厳及びその子連也、巖包は、太平の時勢を迎えたことを明察し、信綱・宗厳以来の教えと刀法を全面的に検討して大改革を断行し、より一層時勢に適応した自由な「直立(つった)つる身の位」を主体とした兵法を確立して当流を大成した。元和6年、利厳は義直公が一流の妙諦を了したるを喜び、道統を伝えて第四世とした。

義直公はその後、利厳の子、連也巖包に正統を譲り、巖包は尾張藩主第二代徳川光友に相伝した。このようにして、当流の道統は尾張柳生家代々の師範と尾張藩主徳川氏のうち兵法に堪能なる方々により伝えられた。

第十九世柳生巖周は尾張侯最後の兵法師範であったが、大正2年、明治天皇の当流保存の御聖旨により、宮内省済寧館に出仕した。第二十世柳生巖長は、近衛供奉将校團師範に任せられた。戦後、昭和30年、柳生会を設立し流祖以来の道業を興した。昭和42年からは、第二十一世柳生延春巖道師範がこれを受け継ぎ、東京・名古屋・大阪を中心に、当流の純正なる弘流と謹持に身を挺すると共に日本古武道協会常任理事として、眞の古武道の発展に尽力してきたが、平成19年5月に享年88歳で逝去した。その後、第二十二世柳生耕一巖信師範が道統を受け継ぎ今日に至る。

23. 柳生心眼流體術 (流祖) 荒木又右衛門吉村

当流は、柔術、剣術、棒術、居合術等を含む総合武道である。流祖は荒木又右衛門吉村で荒木堂と号し、法祖には柳生十兵衛をいただき、流名の心眼とは、禪家の喝の声を出さず目に現す事としている。当流の修行方法は柔術を中心とし、身体動作、立位進退、腰の据え方、手足の調和などの基本を体得した後、各種武器の修練に入るのを原則としている。

心眼流は元来仙台の発祥で、仙台にもその伝系が継承されているが、二世小山左門は享保3年(1718)仙台に生まれ心眼流を修行、諸国を回遊修行後、江戸浅草にて道場を開き18年にわたって門弟を指南したといわれている。

小山は晩年、郷里に還住したが、その流れは当流江戸系として今日、十世武藤正雄から十一世梶塚靖司宗家に伝承されている。七世大島正照は、新徴組に参加し、勝海舟・山岡徹舟等と交わり、八世星野天知は明治文壇において、文芸雑誌「文学界」の同人として島崎藤村・北村透谷・樋口一葉等と交わり、明治文化に新風を送り込んだ。また、天知は、明治女学校にて、島崎藤村と共に教壇に立ちつつ女子教養の一助として武芸科を創立し、心眼流を教授している。島崎藤村が恋心を抱いた女性、左藤輔子の名も、その門人帳に見え、明治27年に目録を受けている。合気道の植芝盛平開祖や柔道の産みの親嘉納治五郎氏も青年の折、当流を学ばれている。

24. 柳生制剛流抜刀 (流祖) 水早長左衛門信正

制剛流の流祖水早長左衛門信正から極意を伝えられた梶原源左衛門直景は、その後尾張藩主義直に仕え、制剛流柔術を尾張藩に伝えた。勢州出身の長岡房英師は制剛流抜刀術の奥義を究め、また尾張柳生家の高弟で、兵法補佐に任じた。次代、長岡房成師は、特に新陰流の達人で、古来相伝の制剛流抜刀を大成した。これが柳生家に伝えられ、柳生巖周師及び柳生巖長師により、新陰流の術理に則り全面的に練り直され、柳生制剛流として完成された。現在の柳生耕一巖信師範にそのまま正しく伝承されている。

25. 琉球古武術

琉球武術は、徒手空拳術と武器術の二つから構成される。一般に前者を空手と呼び、後者を琉球古武術と称している。琉球古武術は八種の武器（棒、サイ、トンファー、ヌンチャク、鎌、鉄甲、ティンベー、スルシン）を使用し、武器毎にそれぞれの特色技を含み、琉球武術の要素と技法を奥深く秘蔵している。現在残されている型の大部分は二百年から数百年程以前の父祖達人の足跡である。

琉球古武術が歴史に現れ始めたのは、今から七百年程以前。日本で言えば、鎌倉、南北朝の時代。琉球の按司（あじ）の時代そして南山、中山、北山の三山が割拠し、また統合された百余年の間の戦に使用されたものであり、またそれら武器の使用法であったといわれている。時代を経て17、18、19世紀には添石（そえいし）、佐久川（さくがわ）、北谷屋良（ちやたんや

ら) 等の大家が輩出し、隆盛を極めた。しかし、時代の変遷とともに継承者も徐々に減り、衰微の一途をたどり、ごくわずかな人々によってのみ点々と保存されてきたのである。

こうした状況を憂慮した大正初期の先人達は、空手とともに琉球武術の双璧をなすこの琉球古武術の保存と振興に努力を傾注した。特に、屋比久孟伝師の門下、平信賢師は、昭和15年に保存振興会を創設し、長い年月を経過して伝來した各型を生涯を通じて集大成された。

当「琉球古武術保存振興会」は集大成された八種の武器からなる四十二の伝承型ならびにその全型の皆伝を受けた井上元勝が故師の遺命により編制した八種の武器の各使い方、基本組手、分解組手等一連の技術体系とともに正しく保存振興している。特に四十二の伝承型のうち、二十二が棒の型である。それだけ良く研究された含蓄ある棒法であり、琉球古武術の白眉の存在である。型名を「・・・の棍（こん）」という。現在、井上貴勝が宗家・会長としてこれを継承し、東京都に総本部を置く。

道場及び教場所在地 (あいうえお順で掲載)

合 気 道 教 場	木 田 塾 道 場	海部郡美和町木田字東阿弥陀22	滝 本 清 三
	春 日 井 道 場	春日井市鳥居松町(春日井警察署内)	滝 本 清 三
	下 原 道 場	春日井市下原町1748	滝 本 清 三
伊勢神宮外苑弓道場		三重県伊勢市神宮外苑内	
伊 勢 柳 剛 流 教 場	津 武 道 研 修 会	三重県津市結城会館内	
小 笠 原 礼 法・弓 術・ 弓 馬 術 教 場・31世 宗 家 教 場		神奈川県藤沢市鵠沼海岸2-17-4 http://www.ogasawara-ryu.gr.jp	小 笠 原 清 忠
尾 張 貫 流 槍 術 春 風 館 柳 生 新 陰 流 兵 法		名古屋市中川区宗円町2-24	加 藤 伊 三 男
鹿 島 新 當 流 劍 術	鹿 島 新 當 流 道 場	茨木県鹿嶋市宮中1-3-39	吉 川 常 隆
鞍 馬 流 劍 術 習 成 館	道 場	東京都新宿区信濃町11-12習成館	柴 田 章 雄
示 現 流 兵 法 劍 術	示 現 流 兵 法 所 史 料 館	鹿児島市東千石町2-2	東 郷 重 賢
新 陰 流 居 合 術 道 場	精 勇 館	名古屋市西区稻生町7-36	鹿 嶋 清 治
	四 日 市 和 道 館	三重県四日市市十七軒町60	秋 田 森 治
	東 別 院 洗 心 道 場	名古屋市中区橘町	
	ナ オ リ 会 館	名古屋市東区代官町27-5	
心 形 刀 流 武 芸 形	龜 山 演 武 場	三重県龜山市本丸町537	元治2年山崎雲流軒 により開場心形刀流の 道場として現在に至る
代 表 者 宅		三重県龜山市東町1-8-26	小 林 強

神道夢想流杖術教場	日本武道館	東京都千代田区北の丸2-3	古川瞬也 椎屋光男
緑スポーツセンター		名古屋市緑区相原郷一丁目2901	三澤芳郎
露橋スポーツセンター		名古屋市中川区露橋2	片田征治
武心塾		豊田市中町朝日23	向井田武
半田教場		半田市川田町169-2	松宮政重
日本ガイシ スポーツプラザ		名古屋市南区東又兵工町5-1-16	坂下國治
神道夢想流杖道教場	愛杖会大府教場	mhamaji@unichemco.jp	濱地光男
清光庵道場		大府市桃山町	
メディアス体育馆おおぶ		大府市横根町	
大府市藤井神社		大府市追分町	
愛杖会平田教場		名古屋市西区西原町	富田 隆
平田コミュニティ センター		http://aijokai.cool.coocan.jp/	
春日井武道館		春日井市高山町	
愛杖会名古屋教場		名古屋市緑区松が根台229	池田真由美
神道無念流剣術	新宿BMTスタジオA	東京都新宿区北新宿1-13-19 弘林ビルB1F	城崎建太郎
中目黒ブロードウェイ スタジオB15		東京都目黒区上目黒1-5-10 中目黒マンションB15	城崎建太郎
さいたま市大宮武道館		埼玉県さいたま市見沼区堀崎町12-36	萩崎昭
稔台市民センター		千葉県松戸市稔台7-1-5	土屋正則
三鷹第四中学校体育館		東京都三鷹市上連雀4-18-7	中館秀光

中国 広州支部	広東省広州市花都区新華鎮秀全大道2号 号展麟 大夏A座1302室 shinto.munenryu.yushinkan@gmail.com http://www.shinto-munenryu.jp/	相馬功一
関口流抜刀術教場	春日井市岩成台8-4-5 岩成台西604-304	宮寄勇夫
竹内流柔術道場	岡山県御津郡建部町角石谷1125	竹内藤一郎
立身流本部	千葉県千葉市中央区中央4-8-8 日進ビル6階 http://www.tatsumi-ryu.org/	加藤紘
支部	千葉県佐倉支部 八街支部 市原支部 東京都矢口支部 福島支部 オーストラリア支部 フランス支部 スペイン支部	
天真正伝香取神道流	千葉県香取市香取1827 katori-shintoryu.jp	飯篠快貞
天神真楊流柔術 文京スポーツセンター	東京都文京区大塚3丁目29-2	
千代田スポーツセンター	東京都千代田区内神田2丁目1-8	
新宿スポーツセンター	東京都新宿区大久保3丁目5-1	
東松山武道場	埼玉県東松山市本町1丁目2-21	
伊予三島運動公園	愛媛県四国中央市中之庄町1665番	
四国中央市三島東中学校	愛媛県四国中央市中曾根町199番	
事務局	埼玉県東松山市高坂849-6	渡邊卓也
天道流薙刀道場 愛知県武道館	名古屋市港区丸池町1-1-4	小林静子
可児市鍊成館	可児市谷迫間806-2	小林静子

宝藏院流高田派槍術	奈良 宝 �藏 院 流 槍 術 保 存 会	奈良県奈良市敷島町2丁目481-4 一箭事務所 内	一 箭 順 三
	ならでん武道場 (奈良市中央武道場)	奈良県奈良市法蓮佐保山4丁目1-2	
	名 古 屋 道 場	名古屋市南区桜台2丁目6-13	宮 島 勝
	東 京 道 場	東京都杉並区高円寺北3-33-17 ピュアマンション301	前 田 健 太 郎
	ハンブルグ道場(ドイツ)	Alster Dojo e.V. Veilchenweg 34 22529 Hamburg	ユルゲン・ゼーベック
無雙神傳英信流抜刀兵法 瀧川一流柔術	貫 汪 館 【本 部】 支 部 横 浜 支 部 名 古 屋 西 支 部 北 大 阪 支 部 吳 中 央 支 部 久 留 米 支 部 オーストラリア パース支部 米国 エルパソ支部 粗 インディアナポリス支部 英國 ロンドン支部 トリニダード・トバゴ支部	広島県廿日市市宮内1480 http://kanoukan.web.fc2.com/	森 本 邦 生 内 住 信 之 林 大 介 堂 本 慎 介 三 崎 俊 広 野 村 浩 司 Michael Mackay Pedro Borrego Andrew Bryant Jacob Greasley John Ramirez
柳生新陰流教場	日 本 ガ イ シ ス ポ ーツ プ ラ ザ	名古屋市南区東又兵工町5-1-16	柳 生 耕 一
	愛 知 県 武 道 館 名 古 屋 市 天 白 ス ポ ーツ セン タ ー	名古屋市港区丸池町1-1-4 名古屋市天白区植田3-1502	
	正 武 館 道 場	安城市石曽根13	
	中 野 区 立 体 育 館	東京都中野区中野4丁目	
	豊 中 市 立 武 道 館	大阪府豊中市武道館、ひびき	

柳生心眼流體術教場 柄木黒磯道場

梶塚靖司

事務局

神奈川県横浜市栄区
小菅ヶ谷1-17-11

吉岡写真事務所

<http://www.kunpooan.com/arakido.html>

神奈川逗子武藤道場

神奈川大和郡央道場

神奈川鎌倉道場

神奈川栄稽古場

埼玉行田道場

広島廿日市道場

東京神楽坂稽古場

琉球古武術
保存振興会

東京都目黒区目黒4-20-2
<http://www.hi-ho.ne.jp/ryukyu-kbujut/>

井上貴勝

藏修館

東京都渋谷区渋谷3-4-7